
見上げた空の向こうに

沖田蓮華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見上げた空に向こうに

【Zコード】

Z5964P

【作者名】

沖田蓮華

【あらすじ】

8年ほど前から家族関係がうまくいっていない真希は、不当な扱いを受け、人に異常なまでの気を使うようになっていた。そんなある朝、見るからに不機嫌な男、柳イオリと出会った。

序章

その日は、大きな店に家族全員で来ていた。

「これ可愛くない！？」

「あ、ホントだ。欲しいなら買つてもいいなよ」

はしゃいだ女の子の声が服屋から聞こえてくる。

花柄だが、無駄に着飾ったイメージを持たせない服を、自分の体にあてながら姉が妹に話しかけていた。

「買つてくれるかな？…？」

不安げな声は出すものの、顔は正直なのか微笑みながら姉が言った。それを、大丈夫だとフォローを入れた後、妹は姉と一緒に母のいる方へ足を向けた。

それを黙つて見送った 真希は、ジーンズを見ている兄の方へと向かつた。

「ズボン欲しいの？ お兄ちゃんは」

浅く眉間に皺を寄せながら、なにやら真剣に考え込んでいる兄に声をかけると、

「…ああ。けど、あんまいもん置いてねえな、ここ」

嘆息交じりな返答が返ってきた。

真希からしてみれば、ジーンズはどれも同じにしか見えない。しかし、色や生地が違うといふことぐらいしか判別ができるない真希に比べて、兄はこだわりがあるのか、他のジーンズの方へと行ってしまった。

そんな兄をまた見送った真希は、一人ぼつんと取り残されてしまった。

人の多い休日は、何処に目をやつても人がいる。なのでもともとそんなに服に執着がない彼女は、更に人を気にしながらといふ条件の中で、服を選ぶことが出来ないでいた。

それから、ここでの買い物が終わつたと告げられ、真希は家族と並んで歩き出した。

服屋を出ると、すぐ田の前に靴屋があった。服に興味はないが靴にならあると、真希は真つ直ぐに足を進めた。

自分の好きなチェック柄の靴がすぐに目に留まり、

「ねえ！　これ可愛くない？」

と周りの雑音に搔き消されないように、少し意識して声を上げながら家族を振り返った。

だが誰一人として、彼女を振り返る者はいない。

「……」

だが見知らぬ人から視線を向けられた。それも自分の家族に近い距離で。

聞こえていないはずがないのだ。そこにいる人が気付くのなら、その近くにいるみんなだって聞こえるはずだ。

しかし誰も 見向きもせずに歩いて行ってしまう。

真希は、そのままその場所に留まつてははぐれてしまつと思ひ、走つて追いかけた。

気づいたのは小学3年の頃。

誰に話しかけても 私の家人たちは返事をしなくなつていた。

かえつてくる時はいつも、その相手についてのときだけ。

何が原因なのかは、全く解からない。だからどう対処していいのかが分からず、今年でもう8年田になつてしまつ。

ただ一つわかることが 解かつてしまつたことは、居心地の悪い家になつてしまつたということ。

そして私は、高校生になつてしまつた。

春ひるひ。

静寂に満ちた部屋で田覚ましの音が広がった。それに反応して、分厚い毛布の中でくるまつている物体からぬつと腕が伸び、時計の上にあるボタンを勢いよく押す。

一瞬にして音が止み、再び静寂が部屋を包み込む。

それから数秒後、やっと田覚ましを設定した本人がムクリと起き、三角の形でに座つたままぼーっとしてからベッドを出た。

彼女はいつも、時間ギリギリまで眠る。だからいつも遅刻するというわけではない。

寝過ぎ、とても遅刻しないよう、計算しているのだ。

起きたらすぐ、学校に指定されている服に着替え朝食のパンが焼ける間に、母が作ってくれたお弁当を包み鞄にいれ、パンがいい具合に焼けたところで朝食にする。それが終われば寝ぐせのついて、髪に櫛をとおし、歯を磨いて顔を洗う。それらが終わっても、家を出るまであと15分残っている。

シワにならないよう、家を出る5分前には制服を着るが、それまでする事があるのなら洗濯をするし、なればテレビのニュースを見ている。

おかげで、学校や友だちとの待ち合わせで「寝坊」を理由に遅れ

たことがない。

「ねえ、誰かあたしの櫛しらない？」

ただ一つ、遅刻をするのに理由があるのならそれは、

「ねえ真希」

家族たちによるものだ。

姉 梓は至極当然といったよつて、真希に問うた。

梓の発言には影響力があり、家の者たちが無視をするなんて事はありえず、影でこの家を操つていてもいいほどだ。

「この間この辺りで…」

そう言いながら真希はテレビの前を探し始めた。逆らえぱどいつなるかは、既に知っているのだ。

むかし、梓に言っていた風呂の掃除をしなかつたことがある。もちろん他意は無かつた。ただ忘れていただけだつたのだ。

しかしそれは言い訳に過ぎず、自分が机に向かつていると梓は、「あたし頼んだよね！？」帰つてきたらすぐにお風呂入りたいから、洗つといつて！！

怒りをそのままに、机を思い切り蹴り飛ばした。

真希は驚いて肩をすくめ、

「…『じめんなやー』……」

弱々しく言つた。だがそれも梓の怒りを煽るばかりで、結局はそのまま洗わされることになった。部屋に戻ると、先程梓に蹴られた机の部分がくぼみ、割れていた。

元々木から出来ている分壊れやすかつたが、あの一蹴りでここまで大破するものだろうかと、すぐに疑問に思った。その疑問は当然のもので、梓があの後、自分がいないう間に壊れるまで何度も蹴つていたのだ。

「あ　あつたよ

真希はそう言つて梓に櫛を差し出した。

「そんなどこにあつたんだ～。ありがとね～」

櫛を受け取った梓は機嫌よく、洗面台の方へと行つてしまつた。

それを見送り、溜め息を吐きながらもテレビの左上を見ると、既に家を出る時間は過ぎていた。

「…つー」

真希は慌てて制服に着替え、何も言わずに家を出た。言つたところで返事など返つてくるはずが無いのだ。

8年もの歳月は、確かに彼女の心をえぐつていつていった。

往来で鈍い音が響いている。

路行く人々が、侮蔑の色を隠すことなく荒れ狂っている青年を見ていた。

それに気付いている青年は、目の前に転がっている男をいたぶることを中断し、

「見せモンじゃねえぞっ！」

じろじろと嫌悪感を丸出しに見てきている連中に、喉が張り裂けるほど荒々しく怒鳴った。すると先程とは一変し、そこにいた全員が慌てた様子ですれ違つて行く。たつた一声で張り詰めた空気に、怯えているのだ。

「糞がつ」

肩をすくめながら惨めに去つていいく奴らにそつ吐き捨てながら、先程までいたぶっていた男を振り返つた。

しかしそこに男の姿はない。何滴かの血がそこそこびりついでいるだけだ。

青年は男が逃げたのだと分かると、勢いよく辺りを見回した。後を追つてもう一度、道路に血がこびりつくまで遊んでやればいいと思つたのだ。だが望んだ男の姿は見当たらない。

逃げ足だけは一人前かよ

あの一瞬で逃げ切つていてることに感嘆しつつも、

「つひ……！」

舌打ちは自然としてしまう。

青年　柳イオリは、そのまま適当に歩き出した。本来ならば真っ直ぐに学校に向かうべきのところを適当に。

今年で高校3年になつたものの自覚は全くなく、だからどうしたと、開き直つている状態だ。そもそも、その環境の変化にすぐについて来いという方がどうかしている。そう思えば、登校しようとう考えもおこらない。

イオリは昔から気が短く、気に入らないことがあればすぐに手をあげる問題児だった。

本人もその事について改めるべきだと感じた時期もあったが、根が生えたようになかなか直らず、諦めてしまった。

そうして生きていると、当然そこいらの不良や根っからのヤクザ者に絡まるようになり、自然と力は上がつていった。今となつては、喧嘩は日課である。だが最近は、今までよりも気が短くなつたようで、常に怒りがイオリに付きまとつていた。どうしてここまで腹が立つのか、そして感情を制御出来ない、など自分ではどうしようも出来ない現状にも腹が立つ。

「……俺にどうしてんだよ」

怒りのままにイオリはすぐ横にあるコンクリートの壁に、硬く握った拳を躊躇なく思い切り叩きつけた。

痛みはじわりとまわりに広がっていく。人を殴った回数より壁を殴った回数の方が断然多く、人を殴ったときの鈍い痛みよりも鋭く刺すようなその痛みは、はじめの内だけはイオリを大人しくさせてくれていた。だが、今では慣れてしまいなんとも思わない。

痛みによって自分を抑えることすら出来なくなっているイオリを、誰も止められないというのが今の現状だ。

「…………ツツー！」

叫び出したい思いを握りつぶし、殺氣立つたまま、行く当てもなくイオリは再び歩き出した。

鞄を手に、真希は急いでいた。

毎朝、誰かしらの用事につき合わされてしまい、いつも学校登校には焦りながら走っている。今のところ、まだ遅刻せずにすんでいる。

家の者、特に姉である梓が一番厄介な人物だ。恐らく自分を一番嫌っているのだろう。何が原因で嫌われているのかは解からないが、きっとどこかで怒らせてしまつてやうな事をしてしまつたのだ。

昔はなんの変哲もない、普通の兄妹だった。楽しい事や面白い事があれば、どちらがともなく話しかけ、一緒に声を上げて笑っていた。普通に、喧嘩で言い合いました。感動する事があれば一緒になつて泣いたり、怖い事があれば一緒に怯えていた。

だが今は、そんな光景を傍観する立場になつてしまつている。

一緒に笑つたり泣いたりすれば疎まれ、怯えれば指をさして笑われる。喧嘩も、向こうが仕掛けてきたようなものばかりで、自分が反論すれば鬼の形相になつたり手を上げたり……。仕舞いには他の者に、「私は何も悪くないのに」というセリフを入れて悪者扱い。

いつしか真希は、黙つてその所業全てを受け入れてしまつてやうになつた。

泣く事も笑う事も、怯える事も全て。感情を表現する動作は相手に合わせてするモノになつてしまつたのだ。喧嘩になれば、もう誰

の手も煩わさないようになると、どんなに理不尽だと嘆いても口に言はず、ただそのままを受け入れた。

弁解したところで誰も信じてはくれない。それどころか、聞く耳すら持とうとしないから。

そして、そんな環境で8年余りを過ごし、真希の感覚は完全に狂つた。

だがそうしていれば、苦しまずにする自分がいることを知った。感情を殺し、しかし誰かといふ時はその人に合わせて色々な表情をして、そこにたどり着いた……。

暗い想いに耽りながらも学校へ続く道を走っていると、聞き慣れない、だが不安を煽るような鈍い音がした。ふとそちらに目をやると、真希の行く路を塞ぐように背を向けた、少し長身の男の人。が壁に拳をおいている。だが次の男の行動で、ただ置いているだけではないとわかつた。

「…………ツツー！」

咆哮とも雄叫びともとれるが、声を堪えているのか判別がしつらい。それでもあまり関わらない方がいいことは、一目瞭然だ。

真希は急く気持ちを抑えて、あきらかに不機嫌なその男が歩き去るのをじっと待つた。だが、すぐの曲がり角を右に曲がったところで何かが落ちた。冊子のような、でもそれにしても小さいよつた。しかし彼は気づかずに行ってしまった。

「……」

少し迷つたが、結局はそこまで歩いて近づいた。男の行った先を見ると、すでに影すら残つていない。そつと下を見れば、やはり小さな冊子が落ちている。誰に見られているわけでもなのだが、これではまるで泥棒のような気がしてなんだか居心地の悪い気持ちがある。だが、気づいておいて何もしないというのもまた気持ちが悪い。なにより後々、気になつて仕方がない、なんて事になりそうだ。

ぶつぶつと考えながら拾うと、生徒手帳だった。確かに彼は学生服を着ていた。中を開いてもいいものかと悩んだが、結局は開いてしまつた。たとえ小さくても好奇心には敵わないものだ。

「……私立稜鶴高校、柳イオリ」

知つている高校の名前だった。それも当然で、真希が通つている高校のすぐ近くにあるのだ。

「……」

逡巡と思いをめぐらせていると、聞きなれた音が耳に届いた。学校が閉門してしまうところ意味のチャイムだ。いわば遅刻。

真希はとりわけ焦つた。角を左に曲がれば目の前に校門が見えてくるが、はやくしなければ門が閉まってしまう。だが手元にあるこの生徒手帳も気がかりだ。

「　っ！」

悩んだ結果、真希は落ちていたすぐ近くの壙の上にそれを置いて門へと駆け出した。

誰かが何かしらの悪さを働くために持つて行つてしまつ、といふ可能性を考えれば、自分が持つてているべきなのかもしけないが、本人が落としたことに気づいて戻つてくる方に懸けた。本音を言えば、見ず知らずの人のもの、それも第一印象が悪い人物のものを持つといつ行為は、なんだか阻んでしまうところがある。

少し申し訳ない気持ちもあるが、だからこそ、あまり人目につかない影の方に置いておいた。

(これであの人が気づいてくれれば)

「 こちらとしても安心できる。帰りにまだ置いてあるか確認しよう。」
そう心の中で誓い、真希は門をくぐつた。

壱(4)

鉄で出来ている校門には、長年の雨風で錆びついている部分が多くある。その門を通り越したところで真希は歩調を緩めた。それと同時に後ろから、ガチャンといつ大きな音が聞こえてくる。真希はその音に思わず振り返った。

そこには老人の男性が一人、校門を閉めようと力を込めているとこだつた。はじめてみた時は、ほっそりとしたその肢体では無理があるのでと思ひ、手伝おうしたところ、

「ああ、大丈夫だから」

と笑顔で断られてしまった。今も、すぐにでも手を貸したいと思うが、その男性はあっさりと門を閉めてしまった。校門の外側には、遅刻者となってしまった生徒たちが口々に文句を言つてゐる。だがそれに彼は、

「残念だつたな、お前たち」

と皮肉を言つてみせる。そんな余裕などころを見ると、見掛けによらず体力があるのだろうかと思ひ。

そして彼 松居は、門の向こうにいる生徒たちを背にして、真希の方を振り返つた。すると、

「あなたは今日もセーフだな」

と残念そうに言つた。皮肉とも取れるそれに苦笑しつつ挨拶で返

し、真希は校舎へと足を向けた。だがすぐに呼び止められてしまい、再び松居へと振り返る。

「なんでしょう？」

先程のチャイムと同じく、次のチャイムで教室に入つていなければ、結局は遅刻者扱いにされてしまう。次のチャイムまで15分あるが、松居が門を開める姿を見届けていたために、すでに残り10分になつていて。

遅刻と欠席だけは避けた真希としては、速く教室にある自分の席についてほつとしたい。

急ぐ気持ちを抑えはするも、口調ははやくなつてしまつた。そんな真希に気付くことなく松居は、

「あんた今日は一段と顔色が悪いぞ。なにがあつたのか」

と顎に手を当てながら言つた。

なにかあつたのかと聞かれれば、当然あつた。毎朝何かしらの理由で突っかかるつて来る姉はもちろんのことだが、今朝は思いがけず他にもする事ができてしまった。

真希は、殺氣立つたまま歩いていく男の後姿を思い出した。

どうしてあそこまで怒つっていたのか、理由は全くわからないのだが、近寄らない方がいいことは分かる。だがあの生徒手帳を田にしてしまった以上、少しほは関わりを持つことになるだろう。

やつ思つと、自然と氣分は落ち込み、俯きかげんになつてしまつ。

そんな真希をどうとつたのか、

「あんたも朝から大変だねえ。でもまあ若いんだから、できるだけ好きな事はしておいたほうがいいんだ。でないとワシみたいに、氣づけば老いぼれ、なんてもことになつちまつからな」

と松居は楽しげに言つてみせた。励ましのつもりなのだろう。正直に言つことの出来ない人なのだろうかと思つた。

前々から、むしろ初対面のときから真希を気にかけてくれる松居。自分ではまったく分からぬのだが、いつも顔色が悪いらしい。毎日、朝には可笑しなところがないか鏡を見るが、顔色に関してはなんとも思わない。朝から走っているせいではと思ったこともあったが、それならすでに体力がついているだらうと思つた。

すると、無意識に頬に手を当てていた真希に松居が、

「おー、何してゐる。はやくしないと遅刻になるぞ」

と、とても重要な事を軽く言つてきた。その言葉に我に返つた真希はすぐに自分が身に着けている腕時計に目をやつた。

次のチャイムまで残り3分。

真希は慌てて校舎へと足を向け、心配してくれる松居にお礼を言うのを忘れていた事にすぐ思い至り、振り返り軽く頭を下げるから、改めて校舎へと駆け出した。

そんな真希の姿を笑顔で松居は見送った。

「本郷……、面白く子じやなあ」

心底楽しそうに言つて松居には気づかず、真希は慌てながら校舎へと入っていく。

春(5)

教室に入るとすでに真希以外のクラスのものは、友人たちと楽しそうに話していた。

「ぎやかなその雰囲気にほっと胸をなでおろし、真希はさつさと自分の席に着いて落ち着こうと足を出した。

「わやあ、まきこー！」

だがその一歩を踏み出す寸前で、田の前から女の子が飛んできた。

「わああ」

急な突進に耐え切れず、体制を崩した真希はそのまま後ろへと倒れた。

思っていた以上の衝撃を背中に感じ、真希は声を出すこともできず苦渋の顔で上体を起こした。すると田の前に、先程飛び込んでいた女の子がうつ伏せて自分の胸に顔を埋めている。呼吸以外の動きがまったく見られず、真希は困った。

飛んできた女の子　佐々木宇美は毎朝飛んでくる……。

ズキズキと痛む頭をさすりながら、顔を見るにも出来ない彼女を真希は心配した。

「大丈夫だった、宇美。どこかぶつけた？」

むしろ被害者は真希で、急に飛んできた彼女の方に非はあるのだが真希はいたつて真剣だ。

すると自分の胸に顔を埋めていた宇美が急にふるふると震えだした。どうしたんだと困惑していると彼女は、ぱっと顔を上げた。そのあまりの勢いに気圧される。

そして宇美は、感極まつたと言わんばかりの眩しく輝く笑顔を向けてきた。

「元壁っー。」

急な発言のついで、会話がかみ合っていないような気がすると思い首を傾げる。

すると更に大きな声が上がってくる。

「元壁っー。その軽く傾げた感じとかすこじく気にしてゐるみたいな優しい言葉、なによりも走ってきたと象徴するかのような髪の乱れ具合っー。」

元壁っーと再度繰り返されたその言葉に真希は恥ずかしくなり、慌てて乱れてくると言われた髪を手で梳いていく。

そうしている間にも、まだ自分の上に乗っている彼女は胸の前で手を組み視線を向けてくる。

どうしたものかと悩んでいると、上から聞きなじんだ声がした。

「はやく退いてやれよ宇美」

声のする方に田をやると、すぐ横にある机に男が座っていた。

宇美はちらりと彼を見てから、ぶつかり棒にわかつてると返してから、真希の上から下りた。

彼女が無事に立ったのを見届けてから、真希もまた立ち上がりうとする。

立ちやすい態勢になつたところで、横から手を差し出された。今度はなに、と思いつの先を見ると、座っていたはずの男がすでに先に立つていた。

(い、いいの……?)

少し躊躇しつつ、真希はその手を取ろうと手を伸ばした。がすぐに、また横から新しく手が出てきて、男に伸ばしたはずの手を取られる。

驚いて上を見上げると、鋭い顔をした宇美と男がいた。

「触るな！ 汚れる」

「ふざんけんな。どっちかってえどこめえのせいで汚れるだら」

「ひねせえよ、てか消える。真希の田がじるむ」

「せつか、じるむわけねえだらが、お前が消えろ」

「ああ！？ 男はみんな汚ねえんだよ。よく見れ、黒くじらつてん

だろお前の手。」

お前の手がにじってんじゃねえのなど、2人は負けずぶらうの口論を続ける。

おりおりと戸惑っている真希は、取り敢えずは立つべきだらうと思、宇美の手にある自分の手を戻し、結局は自分で立ち上がった。制服についたゴミを叩き、改めて2人に目を向けると2人ともがこちらを見ていた。

「え」

想定外の状況に驚きの声がそのまま出てしまった。

真希は席に着き、まだ冷える肩を縮めて寒さを凌ぐとしていた。

冬を終え、やっと春が来たと思つがまだ寒さが残つてゐるので、なかなか安心できない。冷え性の真希には、まだ着込んでいないと耐えられない季節もある。

(せめて窓際の席が良かつた……)

くじ引きとは言えなんだか悲しくなつてくるなと思いつつ、冷え切つてしまつてゐる手を机の下で摩りながら、真希は担任の朝の話を聞いていた。

宇美と男　吉田和雅の言い合ひはなかなか終止符を打たず、ついには、真希が結局一人で立つてしまつたことがそうとう氣に入らなかつたようで、その事について口論し始めた。

「おー、お前のせいで一人で立つちまつたじゃねえか！」

「いいやつ、見るからにお前のせいだ！」

「あー、真希大丈夫？　ちゃんとゴミ扱つた？　汚れてない？」

最後は和雅を放置し、宇美が心配そうに、真希の制服に「ゴミ」がついていないかをチェックし始めた。そこで担任が現れ、一時休戦だと告げんばかりの鋭いにらみ合いがやつと終了されたのだ。

おどおどしながらそれを見ていた真希は、酷く申し訳なく思つた。

せっかく差し出してくれた手を、自分がきちんと取らなかつたのがいけなかつたのだ。だから2人は喧嘩してしまつた。

そう思つ真希に反して現実は、ただ巻き込まれてゐるだけにすぎない。だが真希自身はいたつて真剣だ。それでも、事実とは違う理由で一人納得してしまつた真希は、しょんぼりと眉を下げた。

（もつとちやんと相手の事がわかるよつにならなければ……）

そんな義務感を覚えながらも担任の話に耳を傾けていると、担任の低い声とは違う声が聞こえてきた。声を潜めているせいで、あまりうまく聞き取れないが宇美について話しているよつだ。

「 いつもいつも、本当によくやるよね～。あんな地味な女の何がいいんだか……」

「ほんと、毎朝飛びつく意味がわかんないよ。なんの特徴もない相手によくあそこまで入れ込めるわつて、ずっと思つてんだけど。あ、でもあの子、男相手だと口調変わるでしょ。あれウケる」

「あーそれすんごい分かる～、笑えるよねー。てかあの人、杉本さん？ いつも来るのギリギリだけど、部活してるわけでもないのになんであそこまでギリギリになるわけ？ あれ結構気になつてんだけど」

あーそれあたしも気になつてたー、といつの間にか自分の話しが変わつてることに気付き、真希は縮めている肩を更に縮め、できるだけ誰の目にも留まらないこと、無意識に体を強張らせた。

（私に特徴がないことや地味なことなんかは当然だけど、毎朝遅くに来ていることはそれ以上にきっと、私のせいだ……）

全部自分が悪いに違いない。そう自分に言い聞かせ、真希はこの場から消えてしまいたいという衝動を抑えようと、目を強く瞑つた。

気付けば兄妹からも母親からもさげすまれるようになり、それが8年も続いたために真希の感覚は完全に狂っている。すべてが自分のせいなのだ。

真希がまだ小さい頃に父親と別れた母は、4人の子どもを一人で育てていた。それなりに厳しい状態ではあったが真希としては、その頃はみんなで一緒に笑いあうことも出来ていたので毎日が楽しかった。

兄は勉強を教えてくれ、姉の可笑しな発言でよく笑い、妹の怖いもの好きに付き合っては、一緒になつて怖がり抱きあつたりもしていた。だがそんな毎日は、簡単に過ぎていった。

そして一変。

兄妹はもちろんだが母親とも、今ではまともに話すことすら出来ない。

何が原因で、何がいけなかつたのか？ 教えて貰う術を失つてしまつた真希には、どうすることもできない。それからは毎日が絶望のような日々で、家族と話せないだけでこんなにも苦しいものなのだろうかと、毎日のように思うようになった。

それでも、学校には宇美と和雅がいた。2人とは幼馴染で、どん

な時も一緒にいた。

和雅は、小さい頃はよく一緒に遊んでくれたが、最近では学校でしか会う機会がない。それでも、学校ではいろいろと気にかけてくれるし、きちんと話すことも出来る。そして宇美はいつも隣にいてくれる。よく一緒に出掛けることもある。

そしてそれが、自分にとつての唯一の光。

家にいると、どうしても沈んだ気持ちになってしまふ。だが2人のおかげで、何とか今を乗り越えている。

そんな2人にまで無視をされるようになるなど、想像出来ない。

背に伝う嫌な汗を感じながら、真希は強く想つた。

(2人には不愉快な思いをさせなこように、見捨てられないようちやんと気をつけよう)

小さくなつてこる真希を、隣の席に座つてこる宇美は、目をそらさずにじっと見つめていた。

●（7）（前書き）

全く気付かなかつたのですが、お氣に入りに数字ができてこました。
すげえ驚きました。なんか、pも入つて……（汗）

ありがとうございますッ！！

今更ですが、まったくの初心者です。できるだけ丁寧に書いついで、
心がけていますが、それでもやはり、間に余ることが多々あると思います。

ですが、どうぞこれからも宜しくお願ひいたします。

春になると、多くのものが輝いて見える。以前の季節が冬だといふことも関係するのだから。

冬は白のイメージが強くある。何もかもを埋め尽してしまつような景色。おちてくる雪は、良くも悪くも、いろんなものを包みこんでいく。

家々に挟まれた道を、イオリはひたすら歩き続けていた。

一時の間でも、自分でわだかまるモノ全てを消し去りたくて。そして、彼女を見つけ出すため。

それはイオリの大切な習慣となつていて。

どうしても怒りを抑える事の出来ないイオリは、できるだけ人と関わらないよう、ふらふらと歩き回る。それは、今までの経験の結果出した答えだった。

そしてそのまま、ひたすら歩き続けていた。

「の性格に引き付けられる者たち、ろくな奴はない。

それも当然だと理解は出来るものの、誰も好き好んで喧嘩をしているわけではない。

むやみやたらと絡までは堪らない。

それも、本腰を入れたヤクザまで現れるのだ。できるだけ大人しくしているに限る。

だが、人と関わらないからといって全ての怒りが収まるわけでもない。すべてが苛立たしくて仕方がない。そう思う理由が、自分で判らない。

そしてそん時、何もない空中に手を伸ばす女がイオリの田に止まつた。

黒く厚い雲に覆われている空からは、今にも雪が落ちできそうだ。そんな空に手を伸ばす彼女が、異様なほど田についた。

膝下まである白いコート、その下から同じく白く細い脚が見える。愁いを帯びたその横顔は儂げで、彼女自身が白を纏っているせいか、今にも消え入ってしまいそうだ。

そしてイオリは、何故か眼が逸らせないでいる自分に気づいた。

そのあと彼女がどうなるのか、気になったのだ。

しかし彼女は、ただ軽く手を伸ばしただけで、すぐに腕を下ろしてしまった。

それを見た瞬間、イオリの中で收まりかけた怒りが再び表へと出てきた。ただ、今の怒りはいつもとは違う。きちんとした理由があるのだ。

なにかを得ようと思つて手を伸ばしたのではないのか？ 何

故すぐに下りしてしまった。何故すぐに諦めた。

そんな押し問答が自分の中で繰り広げられる。

いつもならここで相手の胸倉でも掴んでいそうなイオリだが、今はそんな気分ではなかつた。

相手が女だからか。

イオリはじつと、彼女を睨みつけた。

だがそんなイオリには気づかず、女は伸ばしていた自分の掌を見つめ、強く握り締めた。

何か、大切なものを自らの手で壊してしまつたような、そんな辛そうな顔で。

しかしそう思うイオリを残して、女はさつと、何もなかつたよう、歩き去つてしまつた。

イオリは、黙つてそんな彼女を見送つた。

全てが憐れに見えた。彼女が消えてしまつ。その一点において。

いつも怒っている自分が、こんなにも深く、彼女の世界に入ってしまつてゐる。その事実が、しばしの間イオリを大人しくさせていた。

沸き起こりかけた怒りが、急速にしほんでいくのが分かる。

いつもでは考へられない。ただただ、腹立たしい思いばかりをして来たのだ。それが急に消えていくかと思えば、また新たな感情が自分の中に芽生えている。いつもと違う感覚。

今のイオリには理解し難いものだ。

これまでに味わった事のないその感覚をどうすればいいのか、イオリは戸惑つた。そして何気なく、彼女がそうやつたように、自分の掌を見つめ、そして空へと伸ばしてみた。

……オチツク……。

全てが無駄に想えてきた。感情に流れられる「すりも。

そして自分の手よりも遠くにある空に手をやる。自然と心が和んだ。だがそれでも、自分でわだかまるものがある。

不可思議な感覚、そして未知の世界。

あの頃のよひ、「イオリは空へと手を伸ばす。

今なら解かる。あの頃感じたものが、何なのか。

そつと手を下ろし、何かを取りこぼしてしまったような思いを引きずりながら、イオリはある場所に向かうため、再び歩き出した。

彼女は今……

壱(7)(後書き)

やつと、ここまで来ました。
改めて読み返すと、イオリがただの変態にしか見えない…；
このままいくと、設定しておいたイオリの性格が崩壊しそうで、大
丈夫かな？ と不安ですvv

そして私同様、

不安定な真希とイオリですが、出会ったあとはラブラブな予定です
ああ！ はやく書きたいっ

昼休み、お弁当と椅子を持参した上で、宇美は真希の机に向かっていた。もともと席が隣だつた分、移動に苦労はないのだが、宇美の顔は何故か沈んでいる。

「どうしたの？ 大丈夫？」

真希にそういう事はないのだが、普通お昼になれば、誰もが「やつと昼が来たつ」と喜びの声を上げる。

「この時間になればもう」などと隠れて早弁をしなくとも、有り難くお昼を頂く事ができるのだから、それも当然な事だと思つ。

よく宇美は、学校に来た時点で「なんだかお腹空いてきた」と言つ。自分のように走つて来ているわけではなく、もちろん朝食を抜いているというわけでもない。

そんな宇美が、「この時間を喜ばない」とは不自然だ。

真希が不思議に思つていると、宇美は溜め息混じりに言つた。

「だつて……、この時間になるともつお腹空いてないんだもん。別に食べたいとも思わないし……」

「どうやら、食欲もないのにせっかくのお弁当を口にする事を残念に思つているようだ。

確かにそれもやうだと、真希は納得した。

真希自身、もう8年も口を利いていない母親だが、それでも何故か欠かさず朝にはお弁当を用意してくれているので、いつも有り難く思い、残さず食べてくる。そして食欲のない日は、美味しく頂くことが出来なくて残念に思うのだ。

「うして無視されてしまうのかは分らないが、残せばそれこそ確実に喧嘩を売つてこないとなる上、それは本意ではない。

そんな事が頭の片隅にある真希は、でもまだ朝は食べなつとうにしている。

そして、朝早くからわざわざ皿分のために作つてくれいることを、宇美も当然分かっている。だからこそ残念に思うのだ。

そんなことを思つてゐるだけにも、宇美は早速お弁当を広げた。

「ああ、やつぱつねいしゃつー。」

さつ あまでの沈んだ顔はどこへ行つたのか、嬉しそうにしながらどんどん口に運んでいく。そんな彼女を微笑ましく思い、真希も自分のお皿に手を向けた。

2段になつてゐるお弁当の1段目はおかずだ。昨日の夕飯の残りや冷凍食品、そして必ず入つてゐる卵焼きと野菜。

むかし、初めてのお弁当がすく嬉しくて、きれいに洗われていくその横で聞いたことがある。

「ねえ、どうやってつくつてるの？」

今思えば、とても普通なことを聞いていたと感ひ。だが母はそんな自分に笑顔で教えてくれた。

「んん～？ それはねえ……」

あまりはつきりとは覚えていないのだが、今では考えられないほどの優しい笑顔だった。一番印象に残っているのは、

「でもやっぱり、一番大切なことは見た目よ。それも色々が一番重要なの」

という言葉だ。何やら必死になつて答えてくれていたような気がする。そして母の言った通り、いつも彩りのいいお弁当に仕上げている。

小ちな思い出だが、真希にとっては酷く嬉しく、今となつては大切なものの一つだ。

今ではあの頃のよつこ話すことはないし、感ひくじれからむづ無い。

と、無意識に自嘲的な笑みになつていていたようだ、隣からすぐとも不思議そうな声が聞こえてきた。

「どうしたの？ 急に」

無意識だったため、宇美の言つている意味が分からぬ真希だったが、自分が何か可笑しい事をしたのだと悟り、何でもない、と首を横に振った。

宇美もそれ以上は突つ込まず、そりこえばと、違つ話題に変えてくれる。

「今日はいつも以上に遅かつたけど、何があつた？」

まさか真希が寝坊なんてことはないだらうし、と付け加えながら宇美はどんどんお顔を頬張つていく。

「あー……、うんまあ……」

すっかり今朝のことを忘れていた真希は、宇美のその言葉をきっかけに思い出し、がっくりと肩を落とした。

いつも通り梓の用事につき合われ、いつも通り慌てて家を出た。唯一いつもと違う事は、あの男の人。

明らかに不機嫌だつた、という印象しか残つていないが、あの生徒手帳を思うと気にせずにはいられない。

男が去り際に落として行つた生徒手帳を、取り敢えずは近くの田に付くところに置いては来たものの、本人が落としたことに気づいてくれたかどうかは謎だ。

帰りにちゃんと確認しておかなければ、と改めて頭に刻み込んだところで、ふとあることを思った。

(どうしてあんなに怒つてたんだわ、……?)

後姿しか目にしていないのだが、男の纏う空気は遠田からでも張

り詰めているように感じた。そしてあの咆哮とも取れる声。感情を抑える事すらままならない様子だった。あそこまでの激情ともなれば、そういうの何かがある男の人にはつたと考へるのが普通だろう。

いつの間にか箸の動きを止め、悶々と考え込んでいる真希の耳に、今度は楽しそうな声が聞こえてきた。

「もしかして……、『王子様』……？」

最後の『王子様』のところだけ、声を潜めて宇美は言った。それに真希は一瞬の沈黙のあと……ぱっと頬を染めた。

そんな真希の反応に気を良くしたのか宇美は、周りを気にしながらも、声を弾ませて言った。

「えっ、ウソ。ほんとにー?」

何故か嬉しそうにしている宇美に詰め寄られ、真希は頬を更に赤く染めた。そして、全く説得力の無いまま、宇美の期待に満ちた言葉を否定した。

弐(2)

「いやー、よかつたじゃん。今時『王子様』なんてそりゃういないよ?」

これ逃したら次はないと思わなきや、といつ楽しげな宇美の言葉を真希は必死に否定した。

「ち違つのシ、ちうこのじやなくて」

「で? どんな人なの?」

だが真希の言葉はあつさり遮られ、宇美は身を乗り出しながら更に聞いてくる。

先程から真希の否定の言葉には、聞く耳持たない、と言わんばかりの態度だ。おかげで、この状況をどう対処すればいいのかと、真希は混乱し始めていた。

そもそも、どんな人なのかと聞かれても、今の自分には答えられるようなものは何一つ持っていないのだ。だが、輝きをもった宇美の眼を見ていると、何か期待に応えるようなことを言わなければと、使命感のようなものが自分の中に芽生えるのもまた、事実だ。

未だにこちらを見つめてくる瞳に負け、真希は白状するより、元の目を伏せた状態で言った。

「……今日はじめて見かけたんだけど、すぐく不機嫌な人、……でした」

我ながら惨めなものだと思つ。

彼女の期待に応えなければ、自分は捨てられてしまうかもしだい。そんな恐怖に压されるかたちになってしまったのだから。

そしてそのためにも、あの男の人の情報を知つておかなければならぬ。

しかし、真希自身は知りたいと思っていたなかつた。だから、彼女の期待に応えたい応えなければと思つたところで、本当に何も知らないのだ。

だがそれも、ただの言い訳に過ぎない。

どう考へても今の答えは間違つていた。

彼女の期待に応えられなかつた。

殺される……ッ！

寒氣がする。指先が冷える。怖い。

真希は、そう思わずにはいられなかつた。

家の者でもないのに「怒られる」という脅迫概念に押しつぶされそうになり、自分を守るために口を硬く閉じ、身を縮めた。

襲つてくるであろう、痛みに備え。

だが予想していた罵倒も、酷い仕打ちもやってこない。それどころか、声すら聞こえてこない。

不思議に思い、怖いと訴える自分の心を押さえ込みながら、真希は恐る恐る宇美のいる方に手をやつた。

（大丈夫、大丈夫、大丈夫。ここにいるのは宇美だから……、あの人は達じやないから……）

強く手を握り締め、覚悟を決める。

鞄の中を漁っている彼女がいた。

「…………？」

予想外といつよりも、ただ呆気に取られたと言つた方が正確だ。

鞄の中に頭を突っ込みかねないほど熱心に、彼女はガサガサと物音を立てながら何かを探している。

「…………」

何か言つた方がいいのか？ それとも何もせずにじつとしているべきなのか？ など、宇美の不思議な行動に少し戸惑いつつ、真希はとりあえず後者を選び大人しくしていることにした。すると宇美が、こちらを振り返つた。

「え、何？ なんか言つた？」

半ば呆気にとられていた為、反応が遅れてしまう。

「宇美の声にはつと我に返つた真希は慌てて、「ひひ」と言つてみせる。その言葉に、そつと軽く返してから、宇美はまた何かを探し始めた。

今度はさほど時間もかからず、「お、あつた」と意地の悪い笑みを浮かべながらこちらに向き直つた。手にはお菓子の袋がある。

「今朝家から持つてきといたんだよねえ。真希も食べるでしょ？」

先程お昼を食べたばかりにもかかわらず、宇美は爽やかな笑顔で袋に手をかける。

一応、話をふつて来たのは彼女の方なのだが、これ以上聞かれたところで、彼女の期待に応えられるだけのことは言えない。なら、この話はここで終わらせてしまつのが妥当だろう。

そう、一人納得した真希は、肩に力が入つていた事に気がついた。

（宇美の行動には少し戸惑つたけど、”いつもものなのだ”と受け入れてしまえば、大丈夫）

真希は差し出された袋にそつと手を伸ばし、口へと運んでいく。がしかし、

「不機嫌かあ」

心臓がはねた。

「つー」

聞いていたとは思つていなかつた真希は、手にしていたお菓子を落としそつになつた。

宇美がちゃんと聞いていたという事に驚いた上、お菓子を落としそうになり、真希は更に慌てた。まだ口に入れていなかつたことが唯一の救いだ。もしそうだつたなら、今頃咽て苦しい思いをしていたに違いない。

おどおどしている真希をそっちはのけに、宇美は淡々としゃべり続ける。

「ううん…… 真希の理想の『王子様』には程遠いね」

その言葉を聞き終えたと同時に、手にしていたお菓子が音を立て潰れた。

そして、その喉につくような音に、真希は反射で身を硬くした。

(つづいて、エ、エヒヒヒ。『んめなわい、『めんなさこ』めんなさこ…)

だが、真希の怖い予想とは裏腹に、「大丈夫?」と、優しげな声が聞こえてきた。

真希は、ほつと息を吐き、改めて宇美へ謝罪した。

弐(3)

すべての授業が終了し、今週の掃除の班以外は各自の目的地に向けて足を伸ばしあじめた。

すでに校門を後にした真希と宇美もまた、どちらとも言わず、それぞれに歩調を合わせながら歩いていた。

「やつだ真希、どうか寄つてかない？ ケーキ食べに行け」
お皿、お弁当を食べた後お菓子を食べていたはずなのだが、まだ食べたりないようだ。

育ち盛りと云ひるものだろうか？ だがしかし、

「あ、えつと……」めん、今日は用事があるから今度にするよ

断る理由はあえて省き、真希は云々言い残して宇美と別れた。

いそいそと歩いていく真希の後姿を、宇美は寂しげに見送つていた。だがそんな思いとは裏腹に、

「あれ、絶対あの後ついて行つたら『王子様』に会える」
と小さく零した。

「 で？ 本気ですか、なんこと

ふいに後ろから声をかけられ、宇美は横に振り返った。

そこには、乱暴に鞄を肩に乗せた和雅がいる。

「いつからいたんだ」という攻め文句は、面倒なのでこの際省く。

「いや、止めとく。今は」

そう言つながらも、宇美は真希から田が離せない。

彼女の望んでいる優しい世界が、どういったものなのか……。およその見当は着いている。

真希の様子が可笑しいと気づいたときには、すでに遅かった。

いつも明るく笑顔で、心優しい真希。だが今は、怯え苦しみ、人に合わせようと必死になつていて。

ある日、彼女から笑顔が消えた。

「何があったの？」

そういう問いかけても、彼女は応えてくれなくて……、とても腹が立つた。

教えてほしかつた。

しかしそうに、その日はやつてきた。

真希が、家までやつて來たのだ。

だがその姿はあまりに痛々しいもので、所々に擦り傷がある上、何か所かに痣や内出血をしている部分もあった。それでも真希は、声を出すことも泣くこともしていなかった。

手当てを済ませてから少しすると、真希はポツポツと話し始めた。途切れ途切れ、単語単語を口にに乗せ、少しづつ少しづつ。

まるで、自分の感情が溢れださないようのこと、氣を張ったよう。

真希の言つた単語を繋ぎ合わせると、予想外の　いや、まだ小学生の時分、そんな事があるのは架空の世界だけだと思っていたのだ。それが現実に在るとは信じきれず、しかし実際に彼女の身に起きていて……、それを証明するように、生々しい傷が目の前にあつた。

彼女をここまで消耗させる事実が知りたいと思つていた。

そしてそれが分かつたら、手を貸して、力になりたいと望んだ。

もう一度彼女に、笑顔が映えるようだ。

だがそれは、自分にはどうしようもない事だつたのだ。

「てか、なんでお前がここにいる。部活じゃないのかよ」

ここに思ひつけあるもの、宇美は和雅へ向き直った。

彼が今ここにいるのは、おかしいはずだ。前に真希と話しているとき、野球部に入ると聞いていたのだ。その彼が今ここにいるといひことは考えるまでもなく、

「おかしいだらうが」

手を腰にあて、悠然と言ひてのける宇美の田は、自然と鋭くなつた。

一応、真希と同じく和雅とは幼馴染みなのだが、いつからか口を利かない仲になつていた。高校に入った今は、口は利くものの、何故か敵視しているようなことになつてしまつてゐる。

どうしても彼に突つかかってしまう」の状況を、どうしたものかと悩んでゐるしだいだ。だが、そんな自分を知つてか知らずか、和雅はそれでも絡んでくる。

「ああ、ちゃんと入つてるぞ。幽霊部員だけど」

「幽霊部員つて……、氣色悪」

じつと、田を逸らす」となく見てくる和雅に、こんな事しか言えない。そんな自分が歯痒くもある。だがしかし、

「なんか文句でもあんのかよ」

と言ひ返されれば、当然、

「んなもんねえよ、馬一鹿。勝手に元へり

ヒヨコ返すしかなー。

(ああ～つー 違つ違つ。こんなことが言いたいんじゃなくて…
…つー)

ぶんぶんと大きくかぶりを振り、宇美は和雅をさりと睨みあげた。

「で? なんかよつ?」

素つ氣なく話題をえてみる。「お前がふつた話だらうが」と和雅がぼやくが、これ以上狂わされたくないので無視。

「いや、ただ帰らうとしたらい前がここにいて、『王子様』だ『ついて行く』だとなんとか言つてたつてだけだ」

とひもそのままだ。なんの変哲もない。

思に通りに事を運ぶところだが、どれだけ難しことか。

「最近は本当にその通りだとよく実感する ところかわかられる。

やつ思つと、段々と腹が立ってきた。深い溜め息とともに全て吐き出せたら、あるいは楽になれるかも知れない。

(……なんか、疲れた……)

勝手に突つかかって勝手に疲れて……。これじゃただの馬鹿だ。

宇美は、極々ありきたりな返答をよこして来た和雅を放置し、歩き出した。すると、すぐさま声をかけられる。

「おい、帰るんじゃねえのかよ」

「お前に関係ねえだろ」と言いたことじろだが、これ以上惨めな思いはしたくない。

宇美は舌打ちをした。

宇美が今足を向けているのは、家とは逆方向にある繁華街の方だ。当然といえば当然の疑問なのだが、今は声も聞きたくない心境だ。

「買い物つ！ ついてくんnaよ」

本当について来るとは思っていないが、思わず口に出てしまつた。

弐(4)

夕日が部屋にあらわれ、真希は吸い寄せられるよのうに窓に近づいた。

つこの間までは受験生で、よく勉強もせずにふらりと歩き回っていたことを思出す。

その頃見た西窓とまったく同じ つこひとはない。季節によつて風景は変わるものだ。

そのことを実感しながら、真希は窓を開け放ち、すっと踊り場に出た。

(柳イオリさん、来なかつた……)

真希は頬杖をつきながらため息を零した。

「イオリ」という名前を、真希は密かに気に入っていた。奥ゆかしく、着物がよく似合つ女性が連想され、なぜか考へてゐるだけで心が和むのだ。

が、実際は不機嫌な男性、である。

頭の中で、「伊織」となつてしまつ真希は、はじめのうちは不思議な感覚を味わっていたが今は、

(男の人でもきれいに響く名前つてあるんだ)

なんてことを感じていた。

だがその名前を持ち歩いている彼本人に、真希はとうとう、本格的に関わることになりそつたと、諦めを感じていた。

放課後、宇美にまた「王子様」のことでからかわれると思い、真希は一人で生徒手帳のある場所へと向かつた。そしてそこには、今朝から微動駄にしていないであろうそれが置かれていたのだ。

真希はその事実に胸をなでおろしてすぐ、がっくりと肩を落とすはめになつた。

まつたく関係のない人の手に渡らなかつたことには、素直に安心した。だがそれは、彼がここを訪れていない事、もしくは落としたことに対する気づいていないといつ、嬉しくない条件付のものだつたのだ。

そして、

(……これは、……どうしたものか……)

と、この状況をどう打破すべきかと、悩む羽目にもなつた。

結局、そのまま真っ直ぐ帰宅するのもどうかと思つた真希は、5分ほど彼が来ないかと待つてみた。

だがやはり、姿をあらわす気配はなく、今度は生徒手帳をじつと見ながら5分ほどを費やした。

(持つて帰るべきか、ここに置いて行くべきか、……)

また、誰かが……、なんてことで不安に思い悩むくらいなら、自分の手元に置いておくべきなのだろうと思つ。だが、家に持ち帰つたところで、その不安を払拭できるとは到底思えなかつた。

家には一応、一人ずつに部屋が与えられている。プライバシーを考えられてのことなのだが、真希にとつてそれは、あまり意味のなさないものだつた。

もともと、家に安心できるような部分はなかつた。

家族とは、出来るだけ関わりを持たぬようにしている。

いつ何時、自分の身に何が起こるかわからない不安と、恐怖。

基本的に、自分の部屋から出ないよつとしてはいるものの、その部屋も、自分の居場所なのかと問われれば、「違う」と、答えるだろつ。

その原因は、妹の希乃だ。

毎朝、何かしらの理由をつけては突っかかるて来る姉の梓もそうだが、自室の事について考えれば、妹の希乃が、一番の重要人物だと、真希は思つている。

理由は、希乃の癖になつてしまつてゐる、盗みだ。

いつの間にそんなことを覚えたのか、幼い頃から真希の部屋に勝手に入つては何かしら物色していく。小さいころは鉛筆や消しゴム、

キー ホルダーなどですんでいたのだが、成長するにつれてその癖は悪化していき、最近ではお金にまで手を出してきた。

そのことを考へると、むしろ「」に置いておく方が安全なのではないのかと思つ。

長い間、悶々と考へた結果真希は、やはり家に持ち帰るのは危険だと判断した。

家に持ち帰れば、必ずと言つていいほどの確率で悪用されかねない。ならば、そなるかもしれないといつ、憶測の段階ですむこの場所の方がまだ良いと思つたのだ。

（歴史を降らなきや、きつと大丈夫……）

安心して物も置けない家。それもそれでどうなのだろうかと、真希はそんなことを思つた。

（普通の家なら、こんな心配をしなくても済むのだろうか。それとも……）

真希はその考へを振り払おうと、ぶんぶんと、大きく頭を振る。

私は「」で生きてきた。

どんなに痛い想いをしても、どんなに辛い想いをしても、だ。

誰も、わかつてくれる人は側にいなかつた。

そんなこの家で、真希は8年という歳月を過ごした。行く当てもなく、帰る場所もここにしかない真希は、それでもそんなこの家に縋つて生きてきたのだ。

「」、「安心して物も置けない家」について考へることとは、今まで一人で頑張ってきた自分自身をも「変」だと思ふことになるのだから。

空を仰ぐと、いくつかの雲が風に流れ、その隙間から日が差し込んでいる。

優しいはずのその光を真希はいつも、自重した笑みを唇にのせて眺める。

これなら雨は大丈夫だろう。そう確信した真希は、部屋に戻り机に向かった。

ほんのつと柔らかな風に包まれ黙々と歩く。それが、ここ最近のイオリなのが、今歩いているのは家の中。それも現在ではあまり見かけない、昭和時代を思わせる一軒家である。

イオリはふと足を止め、横に広がっている久しい光景に眼をとめた。

やたらと広い庭には緑が生い茂り、なぜか池までもがある。

その池の中に魚がいるのかと、幼いころよく覗き込んでいた。だがいくら眼を凝らしても何もいない。普通、鯉ぐらこいるものだろう、今でも思つ。

外に面した長い廊下を、イオリは改めて進んだ。

長い廊下の先にある田舎の部屋にやつとの思いで到着すると、上座の位置に着物を着た両親がいる。

父の一焼は胡坐をかき、腕を組んだ状態で下を向いていた。簡素な着物を崩し眉間に皺を寄せている。固く目を瞑っているようだ。そんな一焼とは対照的に、隣に座っている母の秋穂ははにこやかにこちらを見ていた。淡い紫の生地には何匹かの蝶が飛び、長い髪もきれいに結い上げられている。

「お帰りなさい、イオリ」

ほがらかな空氣を纏っている秋穂だが、その声は低く、よく響く。

イオリは黙つて、2人の真正面になる位置に座つた。

和を好む両親にあわせ、洋室は一つもない。どの部屋にも畳が敷かれており、家中はどぐどぐの匂いで覆われている。

その匂いが不快でしかたがないイオリは今、更に不愉快な人物に呼ばれ、怒りに拍車がかかつていた。

秋穂の声に促されるように一焼がこちらに手をやる。いつもより増している鋭い眼光は、この男の場合無意識のものなのだろう。

「挨拶は」

腹の底に重くのしかかるような声に押され、イオリはしづしづといつた態で畳に手をつき、頭を下げる。

「お久しぶりです」

できるだけ感情を殺し、上辺だけの挨拶をする。頭を上げると畠の前の彼女は、こちらをじっと見て笑んでいる。

イオリは努めて無表情を保ち、改めて父に向き直つた。

両親が揃つて自分と対峙するときの話題は決まって、

「イオリ、お前はこの家の跡取りであることをいつになつたら自覚する」

家名の「こと。

呆れるでも嘆くでも、怒鳴るでもなく一焼は重々しく言ひ。声音だけの問題じゃない。この男の纏う空氣はいつも体全体に圧し掛かってくる。それが鬱陶しくてしかたがない。

イオリはできるだけ険しい顔つきにならないよつこと、口元を軽く緩めた状態で父を見た。

そんなイオリをどう思ったのか、一焼は深い溜め息をこぼし、射るような眼で見返してきた。

「この家にはお前しかいない。わたしの後を継ぐのはお前だ」

拒否権はない、と言外に告げている一焼は、それが当然だとでも思っているのだろう。

どんどん増していく苛立ちを腹に押し込み、イオリは感情とは裏腹に笑顔をつくった。通常のイオリでは考えられないほどの爽やかな笑みだ。

一焼の言つ「継ぐ」とは、今、一焼自身が動かしている会社の事。

柳財閥。もともとは秋穂の父が興した会社だが、婿入りというかたちで一焼が手にしたものだ。そして今、それをイオリに継がせようとしている。

「ですから、高校にも入りました」

イオリは笑顔を崩さぬよう、気を配りながら言った。

「高校など当然だろう。義務教育だけ何ができる」

一焼の冷たい声が耳に届く。

イオリ自身、中卒でどうこうなるような会社でないことは分かっている。そしてその原因は、一焼の手中に収まってから会社の経営状況が右肩上がりであるということ。

（俺がこの男から席を譲り受けたとたん、それにしては寝覚めが悪い）

しかしそれ以前に、イオリには継ぐ意思がなかった。

「でも、イオリが高校には行かないって言つたときは驚いたわ」

自分と一焼の間にできた張り詰めた空氣を、ものともせずに秋穂が朗らかな口調で言つた。そんな秋穂に、一焼はすぐさま注意めいた事を言つ。

「秋穂さんは甘いですよ。今こち笑い話にできるものの、そんなことがあつてはあの会社がこの先どうなることか」

「ふふ、いいじゃないですか。今は笑い話にできるのでしょうか? なら、笑つておかなあや 捧ですよ」

一焼の言葉を意に返さず、秋穂はにこやかに笑う。そんな彼女に降参だと言わんばかりに、一焼は溜め息をこぼした。

相も変わらず、この男は母に対して弱い。

楽天家の秋穂はいつも楽しそうに、朗らかに笑つている。むかしそんな2人を見て、何故父は母と一緒になつたのか、と彼女に聞いたことがある。いつ見ても、父の一焼は彼女に手を焼いているように見えたからだ。その時、そこに惹かれたんだと彼女は言い張つていた。だが実際に一焼がそう言つたのかどうかは謎なものだ。

ふと、その頃は一焼の言われるがままに動いていた自分を思い出す。

苦々しい記憶までもが甦り、イオリは思わず眉間に皺をよせる。

止まらない思考を、いつもならただ黙々と歩き回る」とで制御していた。だが今はそれができない。

増すばかりの怒りをどうにか押さえ込み、2人を注視していたイオリはこの流れでさつさと帰らせてくれないだろうか、と模索する。だがそれを読み取ったのか、一焼が再びこちらに矛先を向けてきた。

「お前、今日学校に行かなかつたようだが、何をしていた」

瞬間、心臓を驚づかみにされたような痛みと、高く鳴った鼓動が全身を駆けた。

背に嫌なものが滑り落ちる。

(もう限界だ)

イオリははとつて顔を伏せ、一焼に見られぬようにした。

今まで押さえ込んでいた怒りが今の一言で零れ出していく。

膝の上にそえている拳を、爪が皮膚を食こちぎるほど強く握り、血が止めどなく流れ出るよう奥歯を噛み締める。

怒りに肩が震えそうになるのを必死に堪え、下を向いた状態でイオリは笑顔を浮かべた。できるだけ自然に、違和感のないようなどと考えている余裕はすでにはない。

(殺してやる。人が必死に押さえ込んできたモノに、軽々しく触れやがって……殺してやる)

その胸倉を息をつけないほどまでに締め上げて、じぱりと動けない身体にしてやる。

実際、今の自分にはそれだけのことが出来る力がある。

が、そんな衝動に駆られているイオリを知らない一焼は再び、「何をしていた」と問い合わせてくる。

怒りに支配されたイオリは、勢いよく面を上げた。

がその時、イオリの頬を冷たい風が撫でていった。それと同時に、記憶が甦り、イオリは息を詰まらせた。

先程とは比べ物にならない、手を伸ばしたくなるほど大切で、だけど今にも消え入ってしまいそうな、儂い存在。

膝下まである白いマートを羽織り、同じく白い手を高くと伸ばす女。

彼女と同じことを自分もした。

そのとき感じた想いをもが、イオリの中に甦る。と同時に、あれほど強く感じたはずの一焼への怒りが急速にしほんしていくを感じた。

(……)

だがそれを実感している暇はなかった。せっかちにも、一焼が声

を上げたのだ。

「おー、何をしていたのかと聞いているんだ」

低く圧し掛かる声に、イオリも負けじと声を張る。

「……また、監視させていたのですか」

先程までなら確實に怒鳴つていただろうが、今は冷静に返すことができるのである。

疑問の形になつてはいるが、イオリには確証があった。

怒りに支配され始めたイオリは、周りにそれを感ずかれまいと「現状維持」を図つた。成績や、教師や友人ととの間にある関係を保ち続けた。

すべては父の田を欺くため。

自分を社長の座に立たせようと必死な一焼の姿は、幼いころから見続けた。そんな父だからこそ、己の感情も制御できずにいる今の自分を、受け入れようとはしないだろうと判断したのだ。

だからこそ「現状維持」だったのだ。

だが一焼は、すぐにそれを見破つた。そしてその証拠を掴まんと、監視役をイオリに送り込んできた。

一焼は一つ溜め息を吐いてから、口を開いた。

「お前がいつまでも子供だからだ

世話が焼けると言いたいのだろう。顔に書いてあるとほんとうに
たもので、一焼は分かりやすい。

ギリ、トイオリが奥歯を噛み締めたとき、

「うそ、一焼さんったらまだトイオリの追つ駆けやつてたの？」

先程注意されたばかりの秋穂が、本気で驚いたと言わんばかりに、
口元に手をやり体を仰け反らせた。

武(7)

「……追っ掛け……」

一焼は度肝を抜かれたように、驚き顔で秋穂を見ながら固まつた。

「あら、違うの？」

そんな夫を見た秋穂もまた、驚き顔でイオリを見る。

そんな中、三角の形に集まつた視線に呆れ、まるで一焼のようないオリは溜め息を吐いた。

先程までの張り詰めた空気は、一体なんだつたのか。

一焼と秋穂、2人は基本的に仲がいい。喧嘩という喧嘩は見たことがない。いつも陽気な秋穂を一焼が正すという現場なら、腹が立つほど見てきたが。ただ、いつも秋穂の雰囲気に流され、最後には必ず一焼が折れる。そしてそれが今だ。

あながち間違つていらない秋穂の言動にショックを受けた一焼は、がっくりと項垂れ、それを秋穂が苦笑しながら慰めている。

仲がいいのはいい事だ。イオリもはじめの内だけは暖かく見守っていた。だが、ここまで見せつけられては誰であろうと、段々怒りが募つてくるものだわ。

あまりに腹の立つ要素ばかりある自分の家に、イオリは貧乏搖すりもせずに耐えている自分を、偉いと宥める。

荒れ狂つ口の心情。まるで、何もかもを飲み込んでしまつ砂嵐の
よつこ汚い。」のままでは、自分の中の何かが壊れてしまつ。

そう思つたイオリは、深く息を吐いた。そして、今まで背を向け
ていた庭に目をやる。

(まだ暗くなるのは早いか)

自然と窓へ注がれた眼に留まつたのは、黒く厚い雲に覆われ、輝
くことのできない夜空。そしてその先に見るのは 。

「あら、もうこんなに暗くなつてゐる」

イオリにつられて空を見上げた秋穂は、無表情に空を仰ぐ息子に
目をやつた。

端正な顔つきの一人息子。長身で、誰が見ても認める美少年。し
かしその心は歪んでしまつている……。

寂しそうに空を見ているイオリに、秋穂はできるだけ優しい口調
を心がけて言つた。

「もう帰りなさい。なんだか今にも雨が降つてしまつよ。それに、
あなたの家はここから結構離れてるんだから」

これ以上暗くなる前に。そう秋穂が言い終わつてから少しして、

イオリはちらりとこちらに目を向けた。鋭い眼光は一焼譲りなのか、眉間に皺をよせ、あからさまに不機嫌だと告げている。そんな息子に秋穂は微笑した。

「……失礼します」

無感情な声が部屋を満たす。

きれいな一礼を残して、イオリはさっさと部屋を出て行ってしまった。今だ負傷している一焼が、またなにか言いだす前に帰りたかったのだろう。

一焼には目もくれなかつた。

高校に入ったと同時に、イオリは一人暮らしを始めた。もともとこの家が好きでなかつたことは知っていた。それでも、

「おもちゃがないと、つまらないわね」

そう想わずにはいられない。

小さかつた秋穂の声は、イオリには届かなかつただろうが、隣にいる一焼には聞こえていた。まだ完全には復活していないのか、ぼそぼそと、

「またそんなことを……」

と嘆いている。

「だって、一焼さんはいつも仕事ばかりでかまつてくれないもの

「だから、そんないとあいつの前で……、もし聞かれたらいどうするんですか。ただでさえ、嫌われているところ……」

そういう横顔は、少し悲しそうだ。

「もう思つなら、あんな意地悪言わなきゃいいのに」

呆れてそう言つと、一焼は溜め息を吐いた。

もう癖になつてゐるのかしら。そう思つと、2人でいる時間がどれだけ長いかを実感できる。

なんだか嬉しくなつてきた秋穂は、無意識に頬を緩めた。と同時に、先程イオリが出て行った扉から、この家には似つかわしくないスース姿の男が現れた。

名は工藤。父の代からいる彼を、一焼は気に入つたようで、いつも側においている。

「失礼します。一焼様、いかがいたしますか」

「ああ……、今日はもういい。悪いな」

「いえ。では、失礼いたします」

工藤はそれだけを言つと、さつと出て行つてしまつた。そしてこの会話からすると、

「まさか、工藤さんにイオリの追つ掛けやらせてたの?」

「いけないんですか……？」

「いえ。一焼さんいつも彼を側に置いていたよつだつたから、少し不思議に思つて」

「あいつが一番信用できるんですね」

「そうですか」やう笑顔で言ひつけた途端、足に重みができた。

一焼が頭を乗せてきたのだ。

少し驚いてから、秋穂は微笑み、そつと一焼の髪をなでる。透き通りがよく、わらわらと流れていぐ。

「もしかして、また妬いてくれます?」

そう聞いたものの返事は返つてこず、少しして穏やかな寝息が聞こえてきた。

秋穂は、緩む頬をそのままに、一焼の頭を撫で続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5964p/>

見上げた空の向こうに

2011年9月17日11時59分発行